

# 短大における英語授業改革の試み

服部 幹雄

## Reform in Junior College English Classes

Mikio HATTORI

### 1. はじめに

中学校・高等学校の英語教育の土台には指導要領があって日々の授業はこれに準拠して進められている。指導要領を読んでいない教員もいるであろうが、検定教科書は指導要領に沿って書かれているわけであるから教科書を使って授業を進めていけば、どの教員が授業を担当しても指導要領の趣旨からさして逸脱しない授業が行われていると言ってよい。一方、指導要領に相当するものが存在しない短大の英語教育はまったくの野放図とまではいかないまでも、それに近い状態であったことは否めない。つまり、学科に立派なカリキュラムがあり、適切な到達目標が設定されていても、その運用は基本的に教員個人の裁量に任されていた。教員が恣意的に設定する到達目標によって学科全体の到達目標が定まってくる状況であった。基礎学力を持った学生が大多数を占めていた頃はこれでも問題はなかった。すでに基礎力を有しているのであるから科目間の連携などなくても後は出来るだけ英語に触れさせるだけでも相当の効果をあげることができたのである。しかし、ここ数年で短大に入学する学生の学力は急激に低下した。中学校で習得すべき基礎事項さえも危うい学生が散見される現在、この方法が通用しないことは明らかであろう。

言うまでもなく短大で英語を学ぶ目的は多様であってよい。以前は英語で書かれた文学作品の鑑賞を通じて教養を高めることを主目的とする場合が多かったが、最近では異文化理解や実用的なコミュニケーション能力養成に重点を置く短大が増えている。しかし、何の目的で英語を学ぶにせよ、基礎的な英語運用能力がなければいかなる高邁な目標も画餅になってしまう。基礎英語力なくして教養英語も実用英語もなかり。短大でも英語の基礎を体系的に指導することが喫緊の課題となったのである。

短大における英語教育のもう1つの問題点は、できるだけ多くの英語に接しながら経験を積んでいく実践練習、そして学習者がどのレベルにあっても欠かすことができない基本トレーニングが不足していることである。語学における実践練習、基本トレーニングの意義は語学をスポーツに例えてみるとわかりやすい。野球を例に取れば、まず初心者には野球のルールを理解するところから始まって投球フォーム、バットの握り方やスウィングの仕方などが教えられるであろう。これが基礎に当たる。基礎がなければいくら練習を続けても上達は望めまい。しかし、一旦基礎が出来上がったなら、理屈はほどほどにして実践練習の経験を積み重ねていくことになるであろう。スポーツは実際に体を動かして覚えていかなければ上達しないからである。ただ

し、基礎が仕上がっても基本トレーニングは欠かせないものである。大成したプロの野球選手でもランニングや素振りなどの練習は必ず行うに違いない。語学に話を戻すと、英語の基礎とは単語をどのように配置したらまともな英語になるかという英語の基本的構造を知ることである。上述のように、これは中学校で学習済みという前提があったので、短大の英語教育では基礎を教える必要はなかったのである。では十分な実践練習や基本トレーニングは行っていたかという、スピーキングやリスニングなど一部の授業を除いてはいささか心もとない状態だったと言える。その極端な例は文法訳読法で教えられるリーディングの授業であろう。この形式の授業では英語についての知識を日本語で教授することが授業の中心を占める。基本トレーニングに相当する、英文の音読や筆写の繰り返しによってインプットしていく過程は短大のリーディングの授業ではほとんど扱われていなかったと言ってよいし、実践練習に相当する、学生が既習の知識を活用して自分の興味・関心にしがって英文を多読して行く試みも一部の授業で取り入れられていたに過ぎない。

以上まとめてみると、短大の英語授業でまず求められていることは体系的な基礎英語力の指導ということになる。基礎英語力が完成した後は十分な実践練習を行うこと、そしてどの段階であっても基本トレーニングを欠かさないことである。本稿では、筆者のリーディング授業での実践をもとに、2で体系的な基礎学力養成のあり方を、3で実践練習および基本トレーニングの実際について考察していく。

## 2. 体系的な基礎学力の養成

英語の読解力養成の出発点になるのは、英語の基本的構造に基づく「英文の読み方」を体系的に教えていくことである。従来の大学レベルのリーディング指導は、精読・速読どちらに重点が置かれたものであれ、この面の配慮が欠けていたように思われる。

伝統的な訳読形式の授業では、教師によって模範訳や文法的解釈が提示されるが、教師がどのような説明をするかはテキストに大きく依存する。最近のテキストには本文の後に読解のポイントや文法事項をまとめてあるものが多いが、扱われている事項は相当恣意的に選ばれており、それだけで読解に必要な基礎事項が網羅されるという保証はない。さらに内容についての解説にも多くの時間が費やされるのが普通である。大学におけるリーディング教育は本来知識を増やし教養を深め、ひいては人間教育に資するべきものであると考え方が背景にあるためであろうが、これは語学的訓練とは元来関係のないものである。

伝統的訳読授業の対極に位置するかに思われるのが、スキーマを活性化させ、概要を読み取ることに主眼をおいた速読の授業である。和訳や細かい文法事項にこだわらず、直読直解によってすばやく書き手の意向をつかませることに特徴がある。

これらの2種類の授業は読み手の情報処理の観点から見ればボトムアップ処理、トップダウン処理どちらに重点をおくかという点で対立しているかに見える。しかし、両者とも英語の基礎学力が不足する学生に対して体系的な基礎的訓練を与えていないという点では共に同じ欠陥を抱えている。ことに基礎的な英語力が確立していない学生に安易に速読をさせることの危険性はもっと強調されてよい。やさしい英文を多読する効用はすでにあちこちで主張されている。文法訳読教授法への反動としてこの主張が顔を出すことも多い。たとえば、酒井(1996)は、分からない文があっても文法の分析などしないで「やさしすぎる」くらいの英語を多量に読んでいけば読めるようになると説く。「やさしすぎる」文とは自分の学年より3年分戻った学年で

読むレベルの文であるという。これによると短大1年の学生にとって「やさしすぎる」英文とは高校1年生レベルの英文ということになるであろうが、中学3年生レベルの英文でも読めない学生が多数派になりつつあり、このような学生にとっては「やさしすぎる」英文はそもそも存在しないのである。まずは「やさしすぎる」英文が読めるような指導が先決であることは自明であろう。

以上のような考えに基づいて、平成13年度に1年の必修科目 Reading 1を担当した際、授業の主目的として掲げたのは「英文の構造を生み出している基本的なルールを身につける」ことであった。つまり、基礎とは何かを見える形で学生に示し、それを体系的に指導していくことを主眼とした。担当したのは初級クラスで、基礎学力が不足している学生が大半を占めていた。まず教科書の選択に慎重を期した。学生が興味を持つ話題を取り扱っていること、英文のレベルが学生の学力に合っているというのが教科書の具備すべき2大条件であった。同時に背景知識の解説を必要とするようなテーマを扱っているものや読解を通じて異文化理解教育に資する目的をもったものも避けた。背景知識の解説によって本来の授業目的に当てられる時間は確実に少なくなってしまう。また、読解力の向上だけでなく異文化理解もと欲を出せば、基礎学力のない学生にとって大きな負担となることは目に見えている。最近では、知識の摂取吸収に留まらず課題探求能力を育てたいという教員の意気込みを反映して、授業で講読した内容に関連するテーマについて学生に調査させ、研究発表をさせる例も多い。この場合も、語学訓練に当てられる時間は相当犠牲になることを覚悟しなければならない。異文化理解や文学鑑賞を無理に語学訓練と関連づけて学ばせることはない。それはそれで日本語でも十分できるのである。要するに、時間が限られている以上、初・中級の段階では授業の主目的である語学訓練に全力を傾注すべきだということである。

次に教科書に基づいて各ユニットごとにグロッサリー、学習のポイントおよび設問からなるワークシートを作成した。グロッサリーには学生の学力から見て未知であろうと思われる語彙をすべて掲載した。基礎学力のない学生は、辞書の引き方に慣れておらず、語彙力が極端に低いことから、辞書を引く作業にかなりの時間を要すると予測されたからである。学習のポイントの項目には、英文を読むのに必要な文法事項および文法と英文理解とをつなぐ、英文の構造を大きく支配する原則をルールとして示した。文法と英文理解とをつなぐルールは、談話構成上のルールなど文法の授業では一般に扱われず英文読解の盲点となっているものが中心を占めた。やや瑣末と思われるが英文読解上重要な事項はサブルールとして示した。ルールやサブルールは基礎が出来た者にとっては極めて自明のものである。以下ルール・サブルールの一部を示す。

#### ルール例

- (a) 定形動詞のみが単独で述語動詞になれる。命令文を除き、述語動詞に対しては必ず主語がある。
- (b) 英語では長い要素や新情報が文末に来やすい。
- (c) 英語では同一の名詞句を何度も繰り返すことは避けられる。
- (d) and による並列構造に注意：X and Y のように X と Y が and で接続されているとき、X と Y は対等の資格を持っている。

#### サブルール例

- (e) 形容詞が2つ並列して名詞を修飾する場合は A1、A2 N または A1 and A2 N、形容詞が3つ並列する場合は A1、A2 and A3 N の形式が基本になる。

- (f) She is easy/hard to please. のように「～するのがやさしい／難しい」型の構文では不定詞の意味上の目的語は主語と一致する。

授業では、文法事項とルールの解説に十分な時間をかけた。学生が読み誤っている場合は、そのたびごとに誤りの原因を学生との共同作業で突き止め、煩を厭わず分からなくなっている箇所まで戻って基礎から説き起こした。特に学生にとって理解が困難であるが頻出する、それゆえ何度も質問を受ける事項に関しては安易に妥協せず徹底的な説明を心掛けた。その中の1つにサブルール (f) として示した tough 移動構文がある。

- (1) Tom is hard to please.  
(2) The enquiries are hard to deal with.

tough 移動構文の難しさは、補文の目的語が主節主語の位置に繰り上げられることによって、補文の主語・目的語が見えにくくなっている点にある。(2) のように補文の動詞が句動詞になるとさらに難しさが増すようである。実際、学生は(1)の please の主語を Tom であると解釈する傾向にあった。学生になじんだ構造を持つ I want to please you. という文からの類推からと思われる。

- (3) To please Tom is hard.  
(4) It is hard to please Tom.

この構文を理解させるに当たっては、少々理屈っぽいとは思ったが、基底の構造まで戻って説明することにした。すなわち、学生にとってもっとも分かりやすい構造の(3)から出発し、ここから外置によって(4)が生じるとした。その動機は上記のルール (b) である。つまり文頭に長い名詞句を置くことで生じるぎこちなさを避けるということである。そして(4)の Tom を it の位置に代入することで(1)が生成されると説明した。さらにこの構造で用いられるのは、主に難易を表す名詞・形容詞であることも付け加えた。また(4)ではなく(1)が現れる理由として談話構成上 Tom を主題としたい書き手の意図があることについても触れた。

### 3. 実践練習と基本トレーニングの導入

英語学習において英語との接触時間がその成否を決定するといっても過言ではない。ただし Krashen (1985) が言うように、大切なのは「理解可能なインプット」であって、ほとんど意味がわからないものを闇雲に聞いたり読んだりしていても英語力は向上しない。修業年限が短い短大の場合、理解可能なインプットをいかに確保するかはまことに切実な問題である。教室外においてもできるだけ英語に触れてもらうように学生を指導しなければならないが、質と量共に適切なインプットを保証する手立てを講じることが大切である。ただ「とにかく英語をたくさん聞き、読みなさい。」といったところで、学生は戸惑うばかりであろうし、自主的にインプットに励む熱意ある学生ばかりであるとは限らない。どのような素材が適切かを個々の学生に示し、確実にインプットが行われたかどうかを教員側で検証する仕組みが欠かせない。

その試みの1つが平成13年度から始めたペーパーバックマラソンである。これは授業の一環

として学生に教室外でペーパーバックを読ませる実践である。<sup>1</sup> ペーパーバックは学科で大量に購入、それらを5段階のレベルに分類・配架し、貸出が行える態勢を整えた。学生に読ませるページ数は、前期・後期それぞれ最低100ページとした。内容の選択については完全に学生の自主性に任せたが、英文のレベルについては、当初は各学生に始めるべきレベルの目安を指示した。後にこの方針を若干改め、低学力の学生が無理をして高いレベルの本を選択しようとした場合はレベルを下げるように指導したが、高学力の学生が自分の学力より低いレベルの本を読むことには異議を挟まなかった。この実践の目標はとにかく「理解可能なインプット」を増やすことであり、英文の形式面に過剰な注意が向けられることで訳読の悪弊に陥り、インプットの量が減ってしまうことを恐れたからである。

学生には一冊読むごとに、フィクションであれば登場人物・印象に残った場面・当該の本を推薦したい／したくない理由を、ノンフィクションであれば、扱われているトピック・当該の本で学んだこと・当該の本を推薦したい／したくない理由を英語でワークシートに記入させ提出させた。英語で提出させたのは、英文による十分なインプットがあればアウトプットもそれほど苦勞せずに行えるだろうと考えてのことだったが、英文を書くことはかなりの負担を学生に与えたようで、原文のあちこちから拾ってそのまま丸写しする者が続出するという問題が起こった。その反省に立って、平成14年度からはワークシートは日本語で記入させることにしている。

ワークシートからは大半の学生が読書を楽しんでいることが窺える。学力の高い学生ほど英文の内容に関するコメントが多い。言語形式が意識下に沈み、内容に集中できている証左であろう。中級以下の学生になると形式面に関するコメントが増えてくるが、それでも「意外に読みやすい」などの感想が大半を占め、言語形式が内容理解の大きな障害になっていないことがわかる。理想のインプットに一步近づいている感がある。

英語への接触を教室外の学習だけに頼るわけにはいかない。授業中においても極力英語との接触を増やす工夫が必要である。まず出来ることは英語で授業を行うこと、教科書の朗読テープを聞かせるなど耳からのインプットを増やすことである。しかし、いくら英語との接触量を増やしても基礎学力のない多くの学生はそれらをただ聞き流している状態であることが多い。英語が耳から入ってきても頭に入らないのである。そこで重要になってくるのが基本トレーニングを通して英語を確実に頭に定着させること、すなわちインテークを増やすという視点である。英語に接することと接した英語を頭に取り入れることとは別である。たとえ英語と接触する時間が短くても、英語が身につく形で取り入れられれば、長時間にわたる流し聞きよりは効率のよいインプットが行われていることになる。

インテークを増やすのに非常に有効なのは音読の繰り返しであろう。古典的な方法だが、基礎力養成の段階で用いられる方法とされているためか、あるいはコミュニカティブではないという批判もあってか、これらの活動が大学の授業で行われていることを見ることは少ない。しかし、リーディング授業で音読をさせることの効用は非常に大きいと考える。リーディングの究極的な目的が読むという作業を通じてインテークが自力で円滑に行えるような力を養成することにあることを考えると、テキストの英文を頭に取り入れるインテークの作業が授業のどこかで行われてしかるべきであろう。

もとよりリーディングの授業がすべて英語で行われており、英文の内容について英語で討議する形態であれば、インテークの確保の点からはあまり問題がない。学生は授業時間内だけでも相当の「理解可能なインプット」をリスニングを通じて行うことになるし、英語を口に出す

機会も与えられるからである。しかし、伝統的な文法訳読形式の授業においてはインテークの効率はかなり低いとみなければならない。それは授業進行を考えてみれば分かる。まず指名された学生がテキストの英文を音読する。<sup>2</sup> 教師は必要があれば音声面の指導を行う。その後学生は日本語訳を行い、教師は訳についてコメントする。模範訳が与えられる場合も多い。必要であれば文法事項に言及したり、英文の背景知識や登場人物の心理など文学的解釈を行う教師もいるであろう。このような授業では、学生は大半の時間を他の学生の訳や教師の解説を聞くのに費やしていることになり、そもそも英語との接触量が極めて少ないことに注意しなければならない。さらに学生の予習が不十分で英文を読んできておらず、復習も試験前に模範訳を読み返すのが中心（これが意外に多い）ということになればインプットの量はさらに少なくなる。学生は英文読解のルールや訳出の工夫を身につけることはできるであろう。それは自力で新たな英文を読む基礎になるものであるから、その意味で文法訳読式の効用を否定するものではないが、教材の英文のインテークがほとんどなされていないことが問題である。

音読はこうした文法訳読教授法の欠点を多少なりとも補うことができる。しかも方法は極めて簡単である。学生が英文の意味を理解した時点で英文をひたすら音読させるだけである。教材の英文のインテークが行われるだけでなく、ポイントになる読解上のルールや語彙も効率よく習得できるであろう。

聞き取りや読解を通じて理解できた文を繰り返し音読させることはインテークの手段として手軽にでき、効果的な方法であることは疑いないが、その作業が単調で退屈なものになりやすい欠点もある。1つの解決策として、リーディングで読み取った内容をスピーキング練習という形で使いこなす練習をさせることが考えられる。学習者はコミュニケーション型なスピーキング練習を楽しみながら、知らず知らずのうちに音読を繰り返していることになる。<sup>3</sup>

#### 4. まとめ

基礎とは何かを明示した形で学生に与え、学生が納得するまで説明することがこの授業実践の眼目であった。これは「英語はフィーリングで理解するもの」と考えている多数の学生に相当理屈っぽい印象を与えたに違いない。さらにペーパーバックマラソンでは授業外の学習負担が増える。リーディングや文法が学生にあまり人気のない学習活動であることを考えると、学生が期待する「楽しくて楽な授業」とはほど遠いものであったろう。しかし、予想に反して学生による授業評価は非常に好意的なものであった。これまであいまいに適当に処理されてきたことが「はっきりとわかった」という学生の喜びの表明であると信じたい。

#### 注

- 1 平成13年度は「英語演習2」の一環として実施した。平成14年度は「Reading 1」の一環として行っているが、趣旨・方法は前年度とほぼ同じである。
- 2 意味の分からない英文を音読させることには十分警戒しなければならない。学生に和訳させる前に音読をさせる手順だと、予習段階で意味がほぼ理解できる一握りの学生を除いて音読は無意味なものになってしまう。また、学生が音読で蚊の鳴くような声しか出さないのが教師共通の悩みである。実際、語学の授業が行われている教室の外を通ると教師の声は朗々と響くのに学生の声はさっぱり聞こえないということはよく経験することである。学生が声を出さない（というより出せない）のは、意味の分からない英文を読まされていることが原因となっていることも多い。
- 3 筆者が担当する「発音クリニック (旧英語音声学)」の授業では英語のリズムを習得させる訓練として発話

## 短大における英語授業改革の試み

練習にかなりの時間をかけていたが、学生がなかなか声を出さないことが悩みだった。日本人の国民性も関わっているかもしれないが、音読の動機づけが明確でなかったことも理由の1つであろう。つまり、文脈が与えられない細切れの文を発音練習だけの目的のために機械的に模倣させられるのであるから身が入らないのも理解できる。そこで本年度は発音練習の一部に早口言葉を取り入れてみた。ポイントになる音声変化を含んだ早口言葉の文をなるべく速く音読させるのである。一文をよみなく速く言えた学生には数回連続して言わせる。こうすることで早口言葉という課題を克服したいという気持ちが強い動機づけとなって多くの学生が声を出すようになった。

## 引用文献

Krashen, S. 1985. *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. London: Longman.

Sakai, K. (酒井邦秀) 1996. 『どうして英語が使えない?』. 東京: 筑摩書房.